茨城

専称寺文庫

専称寺の本堂。震災で落ちた瓦屋根や土台を修理中。この裏手に文庫がある

専門書類は本館に。全国に無料（送料は借り手が負担）で貸し出している

もともとは本を借りにきていた関さん。いまでは蔵書整理のスタッフに

文庫や新書がぎっしり。そのほとんどが古い装丁のものだったり、絶版のものだったり。震災後、棚をきちんと固定して、整理しなおしたのだそう

入ってすぐの場所にある標語。「私だってまだまだ本を読んで勉強中ですよ」

2009年オープンの新館。ここから被災地へ本を送る活動も始める予定

文庫から専門書まで、絶版本を大切に

蔵書の数、約11万冊。専称寺文庫にある本は、個人の所有物とは思えないほどの量。天井まで埋めつくされる本棚には、ただただ圧倒されるばかりです。これらを集めたのは、「文庫長」であり、専称寺の住職である遠藤勝三さん。

「昔はね、東京で働きながら、定時制の学校に通っていました。でも、そのころは全日制の図書館を使わせてもらえなくて、本当に悔しかったんです。だからこそ、古書店をまわって本を見つけて買うという楽しみを覚えました」

卒業後は都立高校の司書をしながら、さらに慶応大学の通信制で勉強。勉強するほどに蔵書は増えていきます。結婚後、義父にあたる専称寺の住職が亡くなり、あとを継ぐことに。先代の住職は下館市の図書館長を務めた人でもあり、郷土史などの本をたくさん残してくれていたのです。

「義父の蔵書と自分の本をこのままにするのはもったいない。みんなに読んでもらいたいって思って、図書館をつくることに。でも公立の図書館と差別化しなくちゃ意味がないから、ベストセラーや雑誌ではなく絶版本や専門書など長く読める本を集めはじめたんです」

図書館司書と住職を兼任するなか、休日には東京や京都、名古屋などの古書店をまわって集めた、たくさんの本。小説もあれば哲学や人文学の本もあり、そのほとんどが、いまはもう手に入りにくいものばかりです。お兄さんに手伝ってもらい、やっと8万冊を検索できるデータベースもできました。

「でも、専門書や絶版本は、なかなかとっつきにくい。本離れっていわれてるからこそ、もっと気軽に接してほしくって、文庫や新書を集めた新館を建てたんです」

しかし、2年前の地震では本棚が倒れ、整理して復旧するまでに時間も人手もかかりました。それでも、遠藤さんの熱意はとどまるところを知りません。さらなる目標は図書館の2階を増設すること。本に飢えた青春時代を考えれば、いまは恵まれている。もっと、みんなに本を読んでもらいたい。「自分の本をみんなの本に」という気持ちはまだまだ続いていくのです。

遠藤さんが文庫を開くまで

1960年…図書館司書として、高校に勤務
1978年…39歳のとき、専称寺の住職に。59歳まで司書を続ける
2004年4月…寺の敷地内に専称寺文庫オープン
2009年1月…新館オープン
2011年…東日本大震災で本棚が半壊するものの、みんなの協力により、4月に文庫を再開

思い入れの強い本

『杏子・妻隠』

表題の2作品を収録。男女の深い弧度のなかにある愛情を描いている。「いわゆる『哲学がかった小説』で、読みやすいと思います」
古井由吉著（新潮社）

『細雪』

大阪で暮らす上流階級の四姉妹の物語。「映画化されたころの装丁です。貸し出しの注文の多い本で、私も何度も読み返した小説です」
谷崎潤一郎著（新潮社）

『小説世界のロビンソン』

小林信彦の自伝的読書案内。「私は2冊購入して、一冊にはたくさん書き込みながら読みました。勉強になることがたくさん」
小林信彦著（新潮社）

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』

高校生向けに書かれた戦争に関する本。「膨大な資料を読み込んで、わかりやすく説明してくれています。若い人にこそ読んでほしい」
加藤陽子著（朝日出版社）

『未来をつくる図書館』

らの図書館のあり方て書かれたもの。「宣方や、本のそろえ方、姿勢など、学ぶこと っています」
子著（岩波書店）

専称寺文庫
茨城県筑西市乙623　☎0296-22-4881　開館日時／火曜を除く毎日9:00～16:00※臨時休業もあり　http://park22.wakwak.com/~s-bunko/index.html